

## レオーノフの創作史における出版者サバシニコフ

田中まさき

本論は、ソヴィエト時代の文学者レオニード・レオーノフ（1899–1994）の創作活動において、重要な役割を果たしたと考えられる出版者ミハイル・ヴァシーリエヴィッチ・サバシニコフ Михаил Васильевич Сабашников に着目する。とくに、その人物像を明らかにすることによって、彼が初期の作家に及ぼした影響について論考する。

レオーノフのごく初期の執筆活動としては、革命以前、父の流刑先であるアルハンゲリスクに暮らしていた頃、父の刊行していた新聞『北国の朝 Северное утро』に発表した詩作や劇評、さらに、赤軍からの動員解除後、モスクワに戻ってから勤めていた『赤い勇士 Красный воин』紙に発表したものがある。だが、プロの作家として認められるようになるのは、1922年に出版された文集『野ばら Шиповник』に、短編小説『ブルイガ』が掲載されて以降である。作家の生誕100周年を記念して出版された『レオニード・レオーノフ：生涯と創作』でも、『ブルイガ』発表以降に単行本の形で刊行された作品を、作家としての最初期の作品と位置づけている。<sup>1</sup>

1923年から24年にかけて、レオーノフの短編・中編小説を4冊の本の形で初めて公刊したのは、モスクワの個人出版社「サバシニコフ兄弟出版社 Издательство М. и С. Сабашниковых」である。1925年にレオーノフの処女長編小説『穴熊』が国立印刷所 Государственное издательство から出版されるまで、レオーノフの単行本は全てこの出版社が扱ったことになる。ミハイル・サバシニコフは、出版社の創設者であり経営者である。<sup>2</sup> 実はサバシニコフには、若い作家が世に出るために手を貸すもっともな理由があった。それは、彼の次女タチヤーナが1923年7月にレオーノフと結婚した事実である。

従来のレオーノフ研究を見ると、ソ連時代には、作家とサバシニコフとの関係はあまり重要視されていなかった。ソ連崩壊後の1995年に出版された『20世紀ロシア作家の創作遺産より。М. ショーロホフ・А. プラトノフ・Л. レオーノフ』には、レオーノフがマックス・ヴォローシンに宛てた1925年の手紙がまとめて収められているが、そこに付された小論とコメンタリーには、レオーノフとサバシニコフの姻戚関係や、サバシニコフと

<sup>1</sup> Леонид Леонов: Жизнь и творчество. М., 1999. С. 14.

<sup>2</sup> 出版社の名称における С は、元来はミハイルの弟セルゲイの頭文字であったが、セルゲイの死（1909年）の後サバシニコフ夫人ソフィアが共同経営者として名を連ねることになった。したがって、この頃の С はソフィア夫人を指すが、本稿では一貫して「サバシニコフ兄弟出版社」とする。

ヴォローシンの関係が記述されている。<sup>3</sup> しかし、その後の 2001 年のトムソンの著作『妥協のアート』でも、サバシニコフについての言及は作家の岳父としてのごく表面的なものに留まっている。<sup>4</sup> レオーノフの初期散文を扱ったヴァヒトワの著作においても、上記のヴォローシンとの文通に関する部分を除けば、わずかに 1 箇所の言及があるのみである。それは、レオーノフが旧約聖書のテーマから着想した短編「ハム去る Уход Хама」執筆時の 22 年に、作家が聖書の「偽書」を参照しようとした折、文学研究者ゲルシェンゾーンに相談するようサバシニコフがアドバイスした、という記述である。<sup>5</sup>

しかし、レオーノフはサバシニコフの次女タチヤーナと結婚後、サバシニコフ家に同居していた事実があり、<sup>6</sup> ごく身近にいたサバシニコフが若い作家に影響を与えた可能性は少なくない。さらに、サバシニコフの経歴や交友関係は、きわめて多岐にわたるものであった。サバシニコフは晩年にかけて回想録の計画があり、長年にわたって手記を残していた。サバシニコフの長女で児童文学者であったニーナ・アルチューホワ Нина Михайловна Артюхова がそれらの原稿をまとめ、1980 年代に父の「回想」としてクニーガ社より出版した。<sup>7</sup> 特に断りのない場合、サバシニコフ関連の人物については 88 年に出版された追補版『回想 Воспоминания』の記載にもとづくものとする。さらに 95 年には、サバシニコフの孫にあたるタチヤーナ・ペレスレギナ Татьяна Григорьевна Переслегина の手元で保管されていた資料を加えた『М.В.サバシニコフの覚書 Записки Михаила Васильевича Сабашникова』が、サバシニコフ兄弟記念出版社から出版されている。

## レオーノフとサバシニコフの接点 1

レオーノフの娘ナターリヤの回想に書かれているところによれば、レオーノフの側から見たサバシニコフとの関わりは次のように生じた。

レオーノフは赤軍の動員を解除された後、1921 年にモスクワで教育を受けるようにとの指令を受けとった。そこで、母方のおじを頼って上京したレオーノフであったが、モス

---

<sup>3</sup> «Очень часто вспоминаем гостеприимство доброе Ваше...» // Из творческого наследия русских писателей XX века. М. Шолохов А. Платонов Л. Леонов. СПб., 1995. С.490–491. まとめられた書簡にはヴァヒトワによる注釈がふされており、彼女の著書 Вахитова Т. М. Художественная картина мира в прозе Леонида Леонова. СПб., 2007. にも再録されている。

<sup>4</sup> B. Thomson, *The Art of Compromise. The Life and Work of Leonid Leonov* (Toronto: Univ. of Toronto press, 2001), pp.12, 62, 307.

<sup>5</sup> Вахитова Т. М. Художественная картина мира в прозе Леонида Леонова. С.57.

<sup>6</sup> «Очень часто вспоминаем гостеприимство доброе Ваше...» // Из творческого наследия русских писателей XX века. М. Шолохов А. Платонов Л. Леонов. С.491.

<sup>7</sup> サバシニコフの《Воспоминания》は 83 年に初版が発行され、88 年に 2-е изд.が増補版として出版された。

クワ大学の入学試験は面接で落とされ、ストローガノフ芸術学校 Строгановское училище にも入学を拒否され、ついに高等教育を受けることはかなわなかった。しかし幸いなことに、おじの部屋に間借りし、その隣人であった A. ヴァシーリエフという職人の作業場で働かせてもらいながら、モスクワで求職活動が続けることができたのだった。そんなとき、H. ユルツェフという、アルハンゲリスキの父の印刷所をかつて共同所有していた人物と再会し、ユルツェフの友人 C. ラパシエフが編集長を勤める新聞『赤い勇士』の寄稿者としての仕事を紹介された。この『赤い勇士』紙にイラストなどを提供する関係で出入りしていた芸術家に、ワジム・ドミートリエヴィチ・ファリレーエフ Вадим Дмитриевич Фалилеев という版画家がいた。ストローガノフ芸術学校で教鞭もとっていたファリレーエフは、後にヴフテマスでも働いている。また彼の妻も水彩画をよくする芸術家であった。レオーノフは手狭であったおじの部屋から、この画家の住居へと移った（おじの住む部屋はボリシャヤ・ヤキマンカ通り 22 に、ファリレーエフのフラットは同じくボリシャヤ・ヤキマンカ通り 54 にあったという）。ファリレーエフ夫妻は、同居人の青年が書く作品に関心を抱き、自宅の客に朗読を披露するように勧めた。レオーノフは短編小説と『カラファト伝説』の断片を朗読した。『カラファト伝説』は 16 年にすでに執筆され、当初は物語詩に組み入れられる予定であったが、結局は処女長編『穴熊』（1925 年）に編入された。このときいた 15～16 人の招待客の中に、文集『野ばら』を出版していた C. コペリマン Соломон Юрьевич Копельман と、サバシニコフもいたのである。さらにレオーノフは、こうした会に交えてもらうことで、ファリレーエフを介して、当時の芸術愛好家として知られる И. オストロウーホフ Илья Сеиёнович Остроухов とともに知己を得ることになった。ファリレーエフについてはさらに、レオーノフが 1923 年にサバシニコフ一家の全員と知り合って、次女のタチヤーナと気持ちを通わせるようになった頃に、媒酌人よろしくサバシニコフとレオーノフの仲を取り持った、とレオーノフの娘ナターリヤが書いている。<sup>8</sup> したがってレオーノフ側の認識としては、モスクワで文学者として認められるようになっていった過程において、同時にサバシニコフとの結びつきが強まっていたが、そこにはファリレーエフの介在が非常に大きかったということになる。

## レオーノフとサバシニコフの接点 2

では、サバシニコフの側ではレオーノフをどのように受け入れたのだろうか？

サバシニコフの回想ではレオーノフについて『レオーノフとの付き合い。1922 年』と

<sup>8</sup> Леонова Н. Л. Из Воспоминаний // Леонид Леонов в воспоминаниях, дневниках, интервью. М., 1999. С.26–31

いう一章が割かれている。<sup>9</sup> この回想の中でサバシニコフは、ファリレーエフの名前に触れてはいるが、交際の始まった経緯は微妙に異なっている。ある日、帰宅したサバシニコフに、彼の姉のニーナが「知り合ったばかりの才能あふれる若い作家」について話し始めた。ニーナはサバシニコフに対し、彼も是非、この非常に将来有望で、才能あふれる作家と知り合い、作品を出版するべきだと力説した。そこへやって来た親類のマルガリータ・ヴァシーリエヴナ・サバシニコワもニーナと一緒に、作家の若く特異な才能を激賞した。しかしその時点では、サバシニコフは、二人の女性の芸術に対する感性の鋭さには敬意を払いながらも、懐疑的な態度を崩さなかった。というのは、サバシニコフの回想によれば、彼女たちがその作家と知り合いになったのは「人智学（アントロポゾフィー）のグループ антропософские круги」内でのことで、実際にはそうではなかったことが後になって知れたものの、彼らがその若者の才能に熱中するのはサバシニコフにとって異質のセクト секта に属するゆえではないかと疑ったからである。<sup>10</sup>

ここで登場するマルガリータ（1882-1973）と呼ばれる女性は、サバシニコフから見て従兄弟ヴァシーリー・ミハイロヴィッチ・サバシニコフの娘にあたり、詩人マックス・ヴォローシンの最初の妻であった。彼女自身、画を И. レーピンに習った芸術家であり、詩人でもあった。さらに、マルガリータの母マルガリータ・アレクセエヴナは結婚前の姓をアンドレーエワといい、詩人 К. バリモントの2番目の妻エカテリーナとは姉妹である。

さて、ロシア人文学事典の記述によれば「人智学 антропософия」とは、伝統的な「神智学（テオソフィー）」とは分離する形でシュタイナーが提唱した、人間に内在する精神的な力を発現させるための学究であり、神秘主義への傾倒と同時に科学への志向を合わせ持つ。ロシア国内における普及者としては А. ベールイが有名であるが、「人智学のサークルはロシア国内では1913年9月20日にモスクワで組織された。その後ペテルブルグでも結成された。[中略] 1923年「協会」は登録を拒否され、自然崩壊した。蔵書とアーカイブの大部分は政権によって没収された。1931年春、かつての人智学者たちの逮捕が続いた。1937年、ロシアにおける人智学が残り全ての宗教的・哲学的思想の流れとともに存在することを止めた時、逮捕されなかった少数のものも絶滅した」<sup>11</sup> という。また事典によれば、神智学的・人智学的なモチーフがその創作に見られる詩人たちとして、「К. バリモント, М. ヴォローシン, Вяч. Ивэрнов」の名前が挙げられているほか、さまざまな時期にこのサークルに出入りしていた各界の人物の一人として、マルガリータ・サバシ

<sup>9</sup> Михаил Васильевич Сабашников. Записки. М., 1995. С.446-451. なお、この章は上記の『回想・日記・インタビューの中のレオニード・レオーノフ』にも再録されている。

<sup>10</sup> Там же. С.446-448.

<sup>11</sup> Российский гуманитарный энциклопедический словарь. В 3 т. М., 2002. Т.1. С.97.

ニコワ＝ヴォローシナの名前が挙がっている。<sup>12</sup>

サバシニコフ自身は、マルガリータの母らアンドレーエフ家の姉妹とは子供時代からの知り合いであり、1896年にバリモントとエカテリーナが結婚した際には嫁入り支度を手伝うなど身内同然に世話を焼いている。<sup>13</sup> また、バリモントは詩作以外にイギリスの詩人シェリーを始めとする翻訳活動によっても知られるが、エカテリーナも翻訳家として活動していたので、外国文学の翻訳も扱っていたサバシニコフ兄弟出版社には、この分野でも両者との結びつきがあった（バリモントの詩作の単行本出版も扱っている）。同様に、ヴォローシンについても、マルガリータとの短い結婚生活のあとも、サバシニコフ家との関係は悪化しなかったようで、出版社が発行した『諸国、時代と人々Страны, века и люди』シリーズの中で1914年にポール・ド・サン＝ヴィクトールの『神々と人々Боги и люди』を翻訳している。

また、サバシニコフ兄弟出版社は1910年代に人文学の分野で、ペテルブルグの人文学者Ф.ゼリンスキーとの共同編集のもと、古典文化の体系的な翻訳を企図した『世界文学の記念碑Памятники мировой литературы』シリーズ、『諸国、時代と人々』シリーズ、ゲルシェンゾーンの編集による『ロシアのプロピュライアРусские Пропилеи』（プロピュライアとは古代ギリシャのアクロポリスにみられる神殿の前門のこと。転じて「アンソロジー」の意味もある。）シリーズなどを刊行している。<sup>14</sup> サバシニコフ自身は人智学に特別の興味を示していないようだが、これらの出版活動を通じて、人智学や古代文化に興味を抱く文学者との交友を深め、知識を得ていたのだろう。

レオーノフとの関わりに戻ると、サバシニコフは姉のニーナと従兄弟の娘マルガリータの説得の結果、レオーノフの才能に対する懐疑的な態度を残したまま、近いうちに作家の朗読を聞く事を約束した。それから間もなく、とあるコンサート会場で知人のグリゴロフ夫人から夜会に家族全員を招待され、そこでサバシニコフはレオーノフと遭遇し、その朗読を耳にすることになったのだった。<sup>15</sup> グリゴロフ夫妻はかつて商人ナイジョーノフの持ち家だったクドリンスカヤ・サドーヴァヤ通りの広いフラットに暮らしており、それは当時のモスクワの住宅事情からすれば非常に稀な、めぐまれたことであつた。その家の客間には、文学と芸術に関わる、教養ある人々のささやかな社会が形成されていた。この

<sup>12</sup> Там же. なお人智学サークルにおけるマルガリータの活動については Maria Carlson, *No Religion Higher Than Truth: A History of the Theosophical Movement in Russia, 1875–1922* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1993); Богомолов Н. А. Русская литература начала XX века и оккультизм. М., 1999. に詳しい。特に後者ではマルガリータの母と弟についても記述があり、マルガリータがいわば親族ぐるみで人智学サークルと関わりを持っていたことがうかがえる。

<sup>13</sup> Сабашников М. В. Записки. С.189.

<sup>14</sup> Там же. С.8.

<sup>15</sup> Там же. С. 448–449.

サロンの参加者としてサバシニコフが『覚書』で名前を挙げているのは、グリゴーロフ夫妻のほか、ファリレーエフ夫妻、版画家のクラフチェンコ夫妻、かつての出版者コペリマン、文学者のラチンスキー、後から参加し始めたオストロウーホフである。年配者が多く、若者はグリゴーロフ家のソフィヤとサバシニコフ家の二人の娘、サバシニコフの長男はすでに結婚していたので、出席したりしなかったりという具合であった。

グリゴーロフ家の夜会でのレオーノフの作品朗読はそれ以降も何度か催されたが、サバシニコフは第一印象から好感を持ち、自分の友人を招いた集まりで若い作家が作品を朗読する機会を新たに与えたようである。その友人たちとしては、人文学者の M. H. スペランスキー、文学研究者の M. ツャヴロフスキー、歴史家の C. バフルーシン、作家でチュッチェフ研究者の Г. チュルコフ、フルシチョフ夫妻、画家のネステロフ夫妻、生物学者のセヴェルツォフ夫妻、オストロウーホフ、そしてゲルシェンゾーンの名前が挙がっている。レオーノフはこのような会合で自作を朗読することができたほか、聴衆の一人として、サバシニコフの周囲に集う人々の発表を聞くことにもなった。そうした発表の例として、サバシニコフは、「A. ヨッフエ Иоффе による最新の物理学の見解についての報告、白海からの発表者 [名前は欠落している] によるブイリーナの朗誦、シェルギンがアルハンゲリスクを舞台に自作したおとぎ話の発表、マックス・ヴォローシンが行った新作の史詩の朗読」をレオーノフが聞いたと書いている。<sup>16</sup>

両者の回想におけるレオーノフとサバシニコフ家の結びつきを比べてみると、レオーノフの回想では人生の恩人としてのファリレーエフの介在が強調されているのに対し、サバシニコフの回想では、サバシニコフ自身の革命前から築き上げた人脈がもたらした運命的な遭遇として説明されている。

いずれにしても、この時期のレオーノフとサバシニコフの結びつきは、若き作家が地歩を築いていく上で有利に働いたことは容易に推察しうる。例えば、作家のキャリア形成におけるゴーリキーの役割は、レオーノフ研究で重要視されるテーマである。しかし、二人の作家の親交が始まる直接のきっかけとなったゴーリキーからの最初の書簡（1924 年 11 月 2 日付）に先立って、ゴーリキーは作家の K. フェージンへの書簡で「レオーノフとは何者か」と問い合わせている（1924 年 7 月 6 日付）。<sup>17</sup> そしてフェージンはそれに対し、レオーノフがモスクワっ子で 3 冊の本が出版されていることを伝えるとともに、「レオーノフについてもう一つ知っているのは、彼はサバシニコフの婿だということです。そして、それゆえに、彼の本はみんな贅沢な装丁です Знаю еще о Леонове, что он — зять

<sup>16</sup> Там же. С. 450.

<sup>17</sup> Литературное наследство. Т. 70. Горький и советские писатели. Неизданная переписка. М., 1963. С. 473.

Сабашникова и что — поэтому — все его книжечки роскошно изданы。」<sup>18</sup> と回答しているのである（1924 年 7 月 16 日付）。すなわちゴリキーによるレオーノフへの好意的な評価が生まれた背景には、作品そのものの力に加え、作者が「サバシニコフの婿」であることが一種の信頼感を与えた可能性が考えられる。そして、サバシニコフという仲介を経た時、レオーノフはモスクワのインテリサークルでより生き生きと活動し始めるのである。

## サバシニコフの一族について

次に、サバシニコフの出自について、回想に書かれているデータを基に明らかにしていこう。回想では、サバシニコフの祖先はヴォログダ県のカドニコフスキー郡の出身であったものが、シベリアへ渡ったと紹介されている。サバシニコフの祖父ニキータ・フィリップヴィッチは「露米会社 Российско-Американская компания」の代理人 *доверенный* として働き、全生涯をシベリアで暮らしたという。<sup>19</sup> 外川継男によると露米会社とは「帝政ロシアの国策会社。北アメリカ（アラスカ）の植民地経営と極東、北太平洋における貿易の発展を目的として設立された。1799 年にイルクーツクに本拠をおいて設立されたが、1800 年にペテルブルグに本拠を移した。アラスカ、アレウト列島、千島（クリル）列島における毛皮獣の捕獲や鉱物資源の独占的利用と販売を政府から認められ、その株は皇族や高官たちが所有した。アラスカではノヴォ・アルハンゲリスク（現シトカ）に根拠地をかまえ、バラノフやウラングリといった有能な支配人のもとで、アメリカやイギリスの貿易商に対抗して利益をあげた」。<sup>20</sup> サバシニコフの祖父ニキータはキャフタに私宅を構え、職務上頻繁に繰り返された東方地域への出張の基盤を整えた。キャフタは、ロシアと清朝中国との間にキャフタ条約（1727 年）が交わされて以後起こった都市で、税関も設置され、国境をはさんで対するアルタンブラグと共に両国間の交易の拠点となった。ロシア側の毛皮、ラシャ、中国側の綿布、絹布、茶などが輸出入された。<sup>21</sup> 今日のキャフタはブリヤートの中心である（ブリヤート共和国の首都はウラン・ウデ）。ニキータは、多年にわたる、非の打ち所のない功勞に対して「世襲名誉市民 *потомственный почетный гражданин*」の称号を授与された。「名誉市民」とは、1832 年に創設された新しい都市身分である。それまで商人身分の経済的・法的地位が不安定であり、町人身分への転落も少なからず見られたことが、その背景にはあった。名誉市民の身分は、ロシア諸都市の数少ない優れた商工業経営者に与えられた。彼らは、商人が享受していた人頭税や兵役の免除のような様々な特権

<sup>18</sup> Там же. С.475.

<sup>19</sup> Сабашников М. В. Записки. С. 16.

<sup>20</sup> 『ロシアを知る事典〔新版〕』平凡社、2004 年、859-860 頁。

<sup>21</sup> 同上、174-175 頁。

を生涯にわたって手に入れたが、毎年商人ギルドの会員資格を維持する必要はなかった。さらに、商人が第一ギルドについては10年間、第二ギルドについては20年間その身分に留まり、なおかつその間に罪を犯すことがなかった場合には、「世襲名誉市民」になることができた。これは商人とその家族、およびその嗣子に適用されるものである。他方、交易業もしくは製造工業における模範的行為に対して大蔵大臣から金銀の勲章を受賞した商人は、「一代名誉市民」となった。<sup>22</sup>

## 父ヴァシーリーについて

ニキータ（生没年不詳）には9人の子供たちがいたが、次男のヴァシーリー・ニキーチ（1820-1879）がミハイル・サバシニコフの父である。ヴァシーリーは、自ら起業して兄弟と共に輸入茶の卸を扱っていた。当時、中国茶は漢口（ハンコウ）からモンゴルを経由する陸路をキャラバンで運ばれ、キャフタでロシア人商人たちによって試飲されたのち、馬車や橇でモスクワ方面へと発送されていた。キャフタの輸入茶相場は1869年のスエズ運河開通をきっかけに崩落が始まった。中国茶の輸入ルートは以前の陸路よりも、オデッサに荷揚げする海路で拡大し、またロシア帝国内に販売網を確立していたモスクワの商人たちが中国国内に自分たちの代理店を構え始めたからである。<sup>23</sup>

その頃すでにヴァシーリーはモスクワで事業を拡大していた。キャフタの退潮を予見してか、ヴァシーリーの兄ミハイルは60年代にキャフタからモスクワへと移住し、ヴァシーリーもそれに続いていたのである。加えてヴァシーリーは、それ以前からシベリア地域での金の採掘を試み、中国との国境にあるオノン川上流で有力な鉱脈を発見し、兄弟とその利益を分け合っていた。金鉱業者として知られるようになったヴァシーリーは、さらにА. ロドストヴェннаヤ А. И. Родственнаяに招かれ、アムール川支流のゼイ川上流での金の採掘を共同で行うことになった。試掘は成功し、この金脈はゼイ川の採金業と、シャニャフスキー夫妻 Л. А. и А. Л. Шаняевские（妻のリディヤ・アレクセーエヴナはロドストヴェннаヤの娘である）と П. В. ベルグたちの会社の基礎となった。これらの事業のほかに、ヴァシーリーはモスクワへ拠点を移すと同時に、製糖業と材木業にも手を広げている。前者については、チェルニゴフ県にあったコリューコフの砂糖工場の経営に参加し、後者については、モスクワ＝ニージニー・ノヴゴロド線の鉄道建設に枕木や建設資材が必要になることを視野に入れて、ウラジーミル県に地所を購入し森林の伐採を行ったのである。<sup>24</sup>

<sup>22</sup> オーウェン（野口建彦・栖原学訳）『未完のブルジョワジー：帝政ロシア社会におけるモスクワ商人の軌跡、1855～1905年』文真堂、1988年、8-9頁。

<sup>23</sup> Сабашников М. В. Записки. С.24-26.

<sup>24</sup> Там же. С.26-27.



ヴァシーリーは妻セラフィマ・サツヴァチエヴナ（1839–1876）との間に7人の子供をもうけたが、そのうち成人したのはエカテリーナ（1859–1930 年以後）、ニーナ（アントニーナ, 1861–1945）、フォードル（1869–1927）、ミハイル（1871–1943）、セルゲイ（1873–1909）の5人である。フォードルら下の3人の息子たちはみなモスクワ生まれである。ヴァシーリーがアルバート街に建て、子供たちが成長した自宅のあとには、現在ヴァフタンゴフ劇場が建っている。<sup>25</sup> 3人の息子たちのうち、ミハイルより年長のフォードルには、青少年期から自殺を図るなど情緒不安定な傾向が見られ、<sup>26</sup> 父ヴァシーリーの事業を実質的に継承したのはミハイルとセルゲイであった。この二人の兄弟によって「サバシニコフ兄弟出版社」が設立された。K. C. スタニスラフスキー（アレクセーエフ）は著書の中で自分の育った時代と環境を回想し、文化事業に貢献した帝政期末期のモスクワの有力な商人階級について、次のように書いている。「ミハイル・ワシーリエヴィチ・サバシニコフも、ソルダチェンコフと同じく、文学、書籍の分野で保護者となり、文化的に見て注目すべき出版所を創立した」。<sup>27</sup>

### サバシニコフの生涯——少年期

兄弟はまだ幼い少年期にあった70年代後半、両親を相次いで喪った。しかし兄弟にとって幸運だったのは、家庭内に教育を尊ぶ気風があったことである。兄弟の母セラフィマ（旧姓スコルニャコワ Скорнякова, Серафима Савватьевна）はシベリア出身であったが、ペテルブルグのスモーリヌイ女学院で教育を受けた女性であった。<sup>28</sup> キャフタ時代のサバシニコフ家はモスクワやパリから雑誌や書物を取り寄せて読書会を開き、地域の知識層と交流していた。またサバシニコフが両親についてキャフタの老人たちから聞いた話として、

<sup>25</sup> Там же. С.29. サバシニコフが『覚書』を書いていた1930年代当時、すでに建物は往時とは異なる様相を呈していた。サバシニコフ家の邸宅は、В. П. ベルグ（金鉱業者 П. В. ベルグの息子；*Романюк С. К.* Из истории московских переулков.: <http://www.rusarch.ru/romanuk1.htm> の記載による）の所有に移り（1897年）、さらに1917年の革命後に建物は国有化された。21年に建物はモスクワ芸術座第3スタジオ（現ヴァフタンゴフ名称国立アカデミー劇場）に渡され、その後増改築が繰り返された。ヴァフタンゴフ劇場は41年7月24日ドイツ軍の爆撃によって破壊され、今日みられる劇場は戦後の46年に建て直されたものである。*Анисимов А. В.* Театры Москвы: Время и архитектура. М., 1984. С.108, С.171.; *Театр им. Евг. Вахтангова.* М., 1996. С.11. なおヴァフタンゴフ劇場は、レオーノフの処女長編『穴熊』の劇化を原作者に依頼し1927年に初演した（演出はБ. Захарьев）。これは後年に劇作家としても活躍したレオーノフにとって最初の戯曲となった。

<sup>26</sup> *Сабашников. М. В.* Записки. С.90. フォードルは、レオナルド・ダ・ヴィンチの研究に熱中し、実業にはつかず高等遊民のような浪費の生活を送った。そして1927年にイタリアのトリノで客死した。*Там же.* С.345, 561.

<sup>27</sup> スタニスラフスキー（蔵原惟人、江川卓訳）『芸術におけるわが生涯』岩波文庫、2008年、上巻、67頁。

<sup>28</sup> *Сабашников. М. В.* Записки. С.17.

サバシニコフ家には当時、キャフタのインテリたちが出入りし、その中にはデカブリストを含む流刑された政治犯が混じっていたとのことである。<sup>29</sup> キャフタ周辺に流刑されていたデカブリストたちのなかで、サバシニコフの両親が最も親しく交流していたのはベストゥージェフ兄弟 Н. А. и М. А. Бестужевы で、ミハイル・ベストゥージェフの娘エレーナは一時サバシニコフ家で生活していたことがある。<sup>30</sup>

また両親の死後、遺児たちを後見するため、幼年期にある少年たちには伯父のミハイル・ニキーチ・サバシニコフが、すでに幼少とはいえない未成年の娘たちには、モスクワの商人階級の有力者ニコライ・アレクセーエヴィッチ・アブリコーソフと、アリフォン・シャニャフスキーが補佐役としてついた。ニコライ・アブリコーソフは、菓子工場の経営者アレクセイ・イヴァーノヴィッチ・アブリコーソフ А. И. Абрикосов の息子で、ヴァシーリー・サバシニコフの妹マルファ・カンディンスカヤの長女ヴェーラ・ニコラーエヴナと結婚していた。<sup>31</sup> すなわち遺児たちから見て従姉妹の夫にあたる。アブリコーソフの菓子工場は 1804 年から 1918 年まで存在し、1890 年代にはロシア国内で最大規模の製菓会社の一つであった。現在では「ババーエフ Бабаевский」の商標になっている。<sup>32</sup> ネミロヴィッチ＝ダンチェンコの回想には、チェコスロヴァキアの初代首相カレル・クラマーシュにまつわるエピソード（夫妻でモスクワ芸術座の芝居を観劇に来て、スタニスラフスキーや俳優らと挨拶した）があり、そこにアブリコーソフの一族についての言及も見られる。それによるとクラマーシュの妻ナジェージュダ・ニコラーエヴナは、モスクワの富豪フルードフ家 Хлудовы の生まれで、彼らが知り合った時すでにナジェージュダはアブリコーソフ家の嫁であった。彼女の家のサロンは、当時の夫アレクセイ・アブリコーソフが雑誌『哲学と心理学の諸問題 Вопросы философии и психологии』（1889–1918）の出版者のひとりであった関係から、モスクワの知識人のたまり場となっていたという。<sup>33</sup> ニコライ・アブリコーソフは弟アレクセイと共に発行していた『哲学と心理学の諸問題』に数多くの論文を発表する学者であった。<sup>34</sup>

そして、父ヴァシーリーが関与した金鉱会社を縁にサバシニコフ家に親しく出入りしていたシャニャフスキー夫妻は、実業に関するアドバイスばかりでなく、社会思想の観点からもヴァシーリーの娘たちに影響を与えた。特に妻のリディヤ・アレクセーエヴナが女性

<sup>29</sup> Там же. С.22. サバシニコフは父ヴァシーリーがロシア帝国内では発禁処分になっていたゲルツェンの定期刊行物『鐘 Колокол』を中国経由で取り寄せていたと推察している。

<sup>30</sup> Там же. С.544.

<sup>31</sup> Там же. С.70, 522.

<sup>32</sup> Бурыйкин А. Москва купеческая. М., 1991. С.336.

<sup>33</sup> Там же. С.173–174, 337.

<sup>34</sup> Чумаков В. Кондитерская империя Абрикосовых.

<http://www.geohistory.ru/personalien/Konditerskaia-imperiia-Abrikosovih/1.html>

運動に力を入れていたことから、サバシニコフ家の食事会や夜会には、А. Чупров А. И. Чупров, Уражмир・Танеэф Вл. Ив. Танеев (作曲家の兄), А. Коно А. Ф. Кониといった社会活動家が同席することがあった。そうした交流は年長の姉たちを薫陶することが主たる目的となっていたが、ミハイル・サバシニコフも少年期からそういった活動家と直に接する恩恵にあずかったのだった。<sup>35</sup>

アリフォンス・レオーノヴィッチ・シャニャフスキー Альфонс Леонович Шанявский (1837–1905) は、1860年代のロシア社会の思想転換期の思想に影響を受けた、リベラル派の社会活動家である。彼は東シベリアのムラヴィヨフ総督の下で陸軍少佐として勤務していた。サバシニコフの『覚書』によると、シャニャフスキーはシベリア各地や外国に派遣されることが度々であったが、日本を訪れたこともあったらしい。<sup>36</sup> 1905年、アルフォンス・シャニャフスキーは死に瀕してモスクワ市に家と地所を寄贈し、そこから上がる収益で民衆のための大学を設立することを委託した。サバシニコフはシャニャフスキーの遺言により、その執行者の一人に任ぜられた。サバシニコフは未亡人を補佐し、「シャニャフスキーの大学 Московский городской народный университет им. А. Л. Шанявского」の実現に尽力したのち、遺言に従って大学の監査機関の終身メンバーを務め、理事会にも参加していた。<sup>37</sup> サバシニコフは大学建物の建築委員会のリーダーとして、建物を完成させるための追加資金に私財を提供したほか、教材や図書を充実させるための寄付を行った。サバシニコフ兄弟出版社から出版されたすべての出版物を大学に寄贈して図書館の充実を図ったのはその一端である。<sup>38</sup> 教育未修了者のための非公式の教育機関「シャニャフスキーの大学」は1908年10月に開校した。入学に際しては書類の提出は求められなかったが、卒業者に公的な修了証明書が発行されることもなかった。「大学」はモスクワ市ドゥーマによって運営され、一般科学を扱い、ギムナジウムに相当する4年の教程と、大学の教育プログラムに相当する3年の専門教程の2コースがあった。革命後1919年に専門教程はモスクワ大学の組織に編入され、一般科学教程は1920年に「共産主義大学 Коммунистический университет」に改組された。<sup>39</sup>

サバシニコフの2番目の姉のニーナは両親の死後、分配された資産を元手に啓蒙的な事業に参加することを考えていたが、いくつかの案を検討した後1885年に、雑誌『北方通報 Северный вестник』の発行を引き受けることに決めた。それは批評家で雑誌の寄稿者と

<sup>35</sup> Сабашиников М. В. Записки. С.72–74, 76–77.

<sup>36</sup> Там же. С.74.

<sup>37</sup> Сабашиников М. В. Воспоминания. С.506. また、1915年からは理事会の議長を務めた。Политические деятели России 1917: Биографический словарь. М., 1993. С.283.

<sup>38</sup> Чаурина Р. Издательство «М. и С. Сабашиниковы». <http://lib.lseptember.ru/2005/10/11.htm>

<sup>39</sup> Москва. Энциклопедия. М., 1980. С.661–662.

なった H. K. ミハイロフスキーから、雑誌発行のために働けるというだけでなく、編集への発言権も与えると提案されたからである。編集長には、ロシアにおける女性活動家で、1875 年ライプツィヒでロシア人女性として初めて法学博士の学位を取得したアンナ・ミハイロヴナ・エヴレイノワ（1844-1919）が登用されることになった。同じ年ニーナは、エヴレイノワの助手としてクルスクから呼ばれた甥のアレクセイ・ウラジーミロヴィッチ・エヴレイノフと知り合い、結婚した。<sup>40</sup> アンナ・ミハイロヴナ・エヴレイノワを編集長に据えて、ニーナ（結婚後の姓によりエヴレイノワ）は『北方通報』の出版に 85 年から 90 年まで携わった。<sup>41</sup> 『ロシア文学史』によれば「ペテルブルグの雑誌＜北方通報＞は、＜祖国雑記＞廃刊後ミハイロフスキーを寄稿者として迎えるなど、進歩的立場を採る雑誌であったが、1889 年にヴォルィンスキーが寄稿者として加わり、次いで実質的な編集長となるころから、一転して、生れつつある象徴派の拠り所となった」<sup>42</sup> という。

## サバシニコフの大学時代

進歩主義的な雰囲気の中に成長した年長の姉たちは、下の二人の弟の教育に配慮し、大学に進学するまでの間、自宅に学者を招いて弟たちと一緒に学ばせていた。それら教師たちの名前としては、自然科学者の П. Ф. Маевский-Маевский, 人文学者のグルジンスキー А. Е. Грузинский, 人文学者のコルシュ Ф. Е. Корш, 地理学者のメチ С. П. Меч, 歴史家のリュバフスキー М. К. Любавский, 文学者のチホヌラーヴォフ Н. С. Тихонравов らの名前が挙がっている。そして二人の教育は、歴史家で教育者のスペランスキー Н. В. Сперанский によって全体が統括されていた。その後もスペランスキーは兄弟の年長の友人として二人を教導する役割を演じ、「サバシニコフ兄弟出版社」の発展過程においても、会社の出版内容などについて助言を与えるなど、影響を及ぼし続けた。

ミハイルは 1892 年にモスクワ大学に入学し、理数学部で自然科学を学び始めた。弟のセルゲイは 93 年にモスクワ大学に入学し、最初は法学部で学んでいたが、2 年目からは理数学部に転じた。ミハイルが入学した当時のモスクワ大学の生理学者たちは、1863 年のカトコフとの大学規約をめぐる争いの古い記憶によって、リベラルと保守の二つの陣営に分かれていた。チミリャーゼフ К. А. Тимирязев やメンズビル М. А. Мензбир, ダーウィニストたちの進歩的な勢力と、高齢の人類学者ボグダーノフ А. Богданов に代表される勢力であった。そしてメンズビルが率いていた比較解剖学研究室には、リヴォフ В. Н. Львов,

<sup>40</sup> Сабашников М. В. Записки. С.91-93.

<sup>41</sup> Там же. С.548. 『北方通報』は文学・科学・政治を扱う「分厚い」月刊誌で、1885 年から 1898 年までペテルブルグで発行された。

<sup>42</sup> 川端香男里編『ロシア文学史』東京大学出版会、1986 年、245 頁。

スシュキン П. П. Сушкин, セヴェルツォフ А. Н. Северцов, コリツォフ Н. К. Кольцов などの研究者がいた。ミハイルは大学時代、リヴォフの勧めで「回虫の卵の成熟期に染色質の要素数が減少する過程についての顕微鏡学研究」を試験 *зачетная работа* のテーマに選び、実験室での顕微鏡を使った観察に熱中したという。<sup>43</sup> サバシニコフは『覚書』の中で、チミリャーゼフとメンズビル、リヴォフに特別に感謝の気持ちを述べているが、そのうちサバシニコフ兄弟出版社での著作や翻訳の出版を通じて、これらの学者たちとは大学卒業後も関係を保っていくことになる。<sup>44</sup>

興味深いことに、サバシニコフの娘たちが高等教育で選択したものは理系の学問である。サバシニコフの長女のニーナ（1901–1990）は、1918年にポトツキーの女子ギムナジウムからモスクワ大学に編入した後、理数学部の農芸化学科に学び、22年に高等教育を修了することができた。18年に次女タチヤーナ（1903–1979）がギムナジウム入学年齢に達した時には、ニーナが学んだポトツキーのギムナジウムはすでに存在しなくなっていたので、かつてギムナジウムに勤めていた教師たちから自宅で後期教育課程を学ぶことになった。その後タチヤーナもモスクワ大学に進学し、「核の分裂 *деление ядра (хромос)* [ママ。染色体のことか]」を研究していたものの、やがて研究室内で彼女の「ブルジョア的出自」が問題視されるようになった。サバシニコフは事態解決に奔走したが、結果としてタチヤーナは大学を中退してしまった。長男のセルゲイ（1898–1952）については、1917年にモスクワ大学に入学したが、じきに退学せざるを得なくなり、1918年から軍の印刷所で勤務し始めた。サバシニコフは『覚書』の中で、青年時代に受けた自らの教育をなつかしく振り返っているが、それと同時に、二人の子供が高等教育を授かる機会が奪われたことを惜しんでいる。<sup>45</sup>

サバシニコフ兄弟出版社の事業は、彼ら兄弟が大学に進学する以前の1889年、自然科学を教わっていたマエフスキーの植物学に関する著作の出版を思いつき、91年に公刊したところから始まったとされる。植物学の授業に用いていた翻訳本の教科書はドイツの植物についてのもので、ロシアの草木の分類には不都合が多かったことが、計画を着想するきっかけとなった。<sup>46</sup> しかしその出版は、出版者として長姉エカテリーナの名を冠した企画で、<sup>47</sup> 後年のサバシニコフはこの頃の出版活動の未熟だった点を認めている。しかし長じてモスクワ大学に学び、学术界の最先端と直接の接触を持ち、有力な人脈を得たことによってサバシニコフは、自然科学の研究を通じて自らの世界観を確立すると同時に、恩師

<sup>43</sup> *Сабашников М. В. Записки. С.144–145.*

<sup>44</sup> *Сабашников М. В. Воспоминания. М., 1988. С.487, 489, 501.*

<sup>45</sup> *Сабашников М. В. Записки. С.446.*

<sup>46</sup> *Там же. С.150.*

<sup>47</sup> *Там же. С.153.* 兄弟が成年に達していなかったために、姉から資金援助を受けたのである。

たちの著作を出版していくことによって、「サバシニコフ兄弟出版社」としての出版活動を 1897 年から本格化させていった。

またサバシニコフはモスクワ大学で、自然科学の研究のほか、リベラル系に属する経済学者であり統計学者であった A. И. チュプロフと交流を深めた。さらにサバシニコフ兄弟が成年に達し、父の遺産を自ら管理するようになった時には、チュプロフの助言に重きをおいた。<sup>48</sup> 小島修一によれば「A. И. チュプロフは、ロシア歴史学派の代表者であるとともに、『リベラル・ナロードニキ』『ナロードニキ主義の理論家』とも呼ばれている」。<sup>49</sup> さらに、「モスクワ大学の経済学は、経験的・実証的傾向が強く、農業問題に大きな関心を持ち、また農業経済の研究ではナロードニキ思想の影響を強く受けていた。十九世紀後半に約三十年間、モスクワ大学の経済学を指導した A. И. チュプロフの学風が受け継がれたと見てよいであろう」。<sup>50</sup> チュプロフはゼムストヴォ統計 Земская статистика にも大きな影響を与えたといわれる。<sup>51</sup> チュプロフは以前からサバシニコフ家と接点があったが、チュプロフの息子アレクサンドル A. A. Чупров とミハイルがモスクワ大学で友人になったことや、かつての教師で出版社に助言を与えていた Н. В. スペランスキーがチュプロフと家族ぐるみで親しくしていた（スペランスキーの兄弟ウラジーミルの妻は、チュプロフの妻と姉妹だった<sup>52</sup>）ことで縁が深まっていったものである。チュプロフはさまざまな社会組織に参加していたが、1908 年からモスクワの新聞『ロシア報知 Русские ведомости』の協同運営に参加し、11 人の中心メンバーに名前を連ねている。サバシニコフによれば、チュプロフはこの新聞の実質的な編集長であり、モスクワの読者層に影響力を持っていたという。<sup>53</sup> サバシニコフも 1912 年から『ロシア報知』紙の共同運営に参加している。<sup>54</sup>

## サバシニコフの活動——活動家としての側面

これまで見てきたサバシニコフの家庭環境と彼の受けた教育から、彼がどのような人格形成を経てきたかを想像することができよう。次に、実践家として彼がどのような活動をしていったのかについて振り返ってみたい。

<sup>48</sup> Там же. С.6–7.

<sup>49</sup> 児島修一『二十世紀初頭ロシアの経済学者群像』ミネルヴァ書房、2008 年、28 頁。

<sup>50</sup> 同上、7 頁。ミハイルの友人となった息子の A. A. チュプロフも、後に経済統計学者として、マックス・ウェーバーが当時最も注目したロシアの経済学者の一人となった（同書所収の「ロシアの経済学者の略歴と主要著作」19 頁）。

<sup>51</sup> Малая советская энциклопедия. М., 1931. Т.9. С.856.

<sup>52</sup> Сабашников М. В. Записки. С.108–109. さらに Н. В. スペランスキーは、1902 年にチュプロフの娘オリガ・アレクサンドロヴナと結婚している。Там же. С.244.

<sup>53</sup> Там же. С.77, 373.

<sup>54</sup> Там же. С.547.

『覚書』に書いているところでは、サバシニコフは弟セルゲイと共に青年期から積極的に社会活動に参加している。その初期のものとして、1891年の不作による飢餓と、その後続いたコレラ蔓延からの農村の救済活動がある。<sup>55</sup> 成人し、自ら財産を管理できるようになるとミハイルとセルゲイの兄弟は、領地経営の改革に取り組み始めた。<sup>56</sup> 父の遺したウラジーミル県の地所は、長姉エカテリーナと補佐役たちによってコスチノという領地に再編されていたが、1894年にそこに学校や無料の診療施設を建設している。それらの運営を監督し軌道に載せるため、兄弟はこの地に頻繁に滞在し、郡や県のゼムストヴォとの接点を深めていった。<sup>57</sup> また、後に妻となったソフィヤ・ヤーコヴレヴナ・ルキーナ София Яковлевна Лукина (1870–1952) と知り合ったのも、この頃のことである。彼女は裕福ではない貴族階級の出身で、サバシニコフがコスチノに設けた診療所で准医師 фельдшерица として勤務していた。<sup>58</sup>

またこの頃サバシニコフは製糖事業にも本格的に取り組み始めている。長姉エカテリーナと彼女の夫バラノフスキーが不仲となっていたことや、バラノフスキーの縁者に任せた経営が混乱していたことから、父の遺産であったコリューコフの砂糖工場に関する経営権を一旦手放し、1896年には2番目の姉ニーナの夫エヴレイノフとその一族の持ち物で、経営に行き詰まっていたクルスク県のリュビーモフカの砂糖工場を引き受けることにした。弟セルゲイと共に新しい設備導入などの経営改善に努めたことで、数年のうちに事業は立て直された。サバシニコフは全ロシア製糖業者協会に参加するようになり、協会理事に選抜された。<sup>59</sup> さらに、リュビーモフカの砂糖の購入相手であったモスクワの製菓会社（その中にはアブリコーソフの工場も含まれる）が経営に行き詰ると、それらの建て直しにも協力している。<sup>60</sup>

これらの事業を通じて、サバシニコフ兄弟はそれぞれの地域の郡ゼムストヴォの議員としての発言力をつけた（弟のセルゲイはコスチノのあるウラジーミル県ポクロフスキー郡の地方議員、兄のミハイルはポクロフスキー郡とリュビーモフカのあるクルスク県スジャンスキー郡の地方議員）。また兄弟二人ともモスクワ市ドゥーマ議員に選出され、さらにミハイルはモスクワ県ゼムストヴォ議員にもなっている。兄ミハイルは、スジャンスキー

<sup>55</sup> Там же. С.156–158, 164–165.

<sup>56</sup> Там же. С.167.

<sup>57</sup> Там же. С.172–177.

<sup>58</sup> Там же. С.174. ミハイル・サバシニコフとソフィヤは1897年に結婚している。

<sup>59</sup> Там же. С.226. 1900年以降のことと考えられる。全ロシア製糖業者協会は、自由参加ではあったが、ほとんどすべての製糖会社が参加した組織である。第一次世界大戦が始まるまで砂糖生産を統括する中央機関はなく、年に一度の「協会」の総会で砂糖生産にまつわる諸問題が話し合われた。またサバシニコフの参加した理事会は主としてキエフで開かれていた。Там же. С.228–229.

<sup>60</sup> Там же. С.349–352.

郡ゼムストヴォで、郡参事会議長であった П. Д. ドルゴルーコフ公爵 князь Петр Дмитриевич Долгоруков と親交を持った。ドルゴルーコフ公爵は、ゼムストヴォのみならず、「解放同盟 Союз Освобождения」や立憲民主党（カデット）の著名な活動家で、第一ドゥーマ（下院）では副議長を務めている。<sup>61</sup> 「解放同盟」とは、ストルヴェ П. Б. Струве の編集によって 1902 年からシュトゥットガルトで発行された雑誌『解放』から結成された、リベラル知識人の非合法組織である。君主制を維持しつつも憲法と普通選挙を導入することが、彼らの最大の目標であった。ミハイルはドルゴルーコフ公爵やヤクシュキン В. Е. Якушкин によって「解放同盟」に参加した。さらに 1905 年革命の中でミハイルは、10 月に「解放同盟」からの代表者 30 人の内の一人として立憲民主党の結成大会に参加し、党中央委員会に選出された。<sup>62</sup> サバシニコフが党中央委員会の中でとくに信頼を得ていたことは、党中央委員会の所在地がモスクワからペテルブルグに移る 1906 年 4 月まで、党の会計を務めたことから窺える。<sup>63</sup>

サバシニコフは『覚書』の「解放同盟」の結成にまつわるくだりで、「私は政治活動に強い意欲はなかった。しかし社会運動を傍観していることがモラル的に不可能になっていた Я не имел влечения к политической деятельности. Но все складывалось так, что оставаться в стороне от общественного движения было морально невозможно.」<sup>64</sup> と書いているが、この後も左派リベラルの活動家として政治運動に関わり続けていく。それには弟セルゲイの事件とその後の早世が影響したのではないかと思われる（例えば「同盟」に参加したのは弟セルゲイのほうがいく分早かった）。1905 年夏、セルゲイは瀕死の大怪我を負い、その後遺症に苦しめられることになった。これは不幸な事件だったとされているが、セルゲイたちの兄フョードルの知り合いを名乗るフランス人医師ヴァッレが兄弟たちを訪ね、応対したセルゲイに襲い掛かったのである。理由は不明で、ヴァッレは精神異常だったのではないかと考えられている。<sup>65</sup> セルゲイは命を取り留めたものの、頭に受けた傷は重く、国内外で療養を続ける必要に迫られた。それまで常に協調して活動してきた同志である弟が第一線を離れ、その間ミハイルは一人で事に当たらねばならなくなったのである。その後セルゲイは、以前からの出版事業や政治活動を少しずつ再開させたが、やはり元の健康を取り戻すことなく、1909 年 3 月に亡くなってしまう。『覚書』の中でサバシニ

<sup>61</sup> Там же. С.7.

<sup>62</sup> Сабашников М. В. Записки. С.268, 552–553.

<sup>63</sup> Протоколы Центрального комитета конституционно-демократической партии. 1905–1911 гг. М., 1994. Т.1. С.33,73; Съезды и конференции конституционно-демократической партии. 1905–1907 гг. М., 1997. Т.1. С.503–504.

<sup>64</sup> Сабашников М. В. Записки. С.268.

<sup>65</sup> Там же. С.292–293.



コフは、弟セルゲイの能力と人柄を惜しみ、自分よりも多くのことを成し遂げられただろうと早すぎる死を悼んでいる。<sup>66</sup>

1914 年夏、保養の目的でイタリアとドイツを訪れていたサバシニコフの一家は、第一次世界大戦開戦直前に何とかロシアに帰国することができた。<sup>67</sup> 戦争が勃発するとサバシニコフは、全ロシア都市同盟で活発な働きを見せた。これは 1914 年 8 月に全国各地の都市自治体により結成された半官半民の組織で、傷病者の救護と軍の供給を支援することがその目的であった。15 年からはサバシニコフは、都市同盟第 6 シベリア（ブリヤート）医療衛生部隊を率いた。これがブリヤートの部隊と呼ばれたのは、部隊の結成にあたって部分的にブリヤート人の資産が使われたためである。<sup>68</sup> 同年 10 月には都市同盟の本部委員会 *главный комитет* に参加している。<sup>69</sup>

1917 年の二月革命後、サバシニコフはカデット党を主な舞台にして、一層精力的な活動を繰り広げた。4 月にはモスクワで発行準備中の党機関紙の編集委員会に名を連ね、5 月には第 8 回党大会で中央委員会に再選された。さらに 8 月には党の全ロシア・アジテーション委員会に入っている。また、8 月には都市同盟の代表としてモスクワ国家会議にも参加した。<sup>70</sup>

十月革命後、サバシニコフは、ボリシェヴィキの新政権に対抗するためカデット党が 1917 年 11 月に組織した地下組織「9 人組 *Девятка*」に加わった。1918 年 5 月から 8 月までは他のカデット党中央委員とともに身柄を拘束された。ついで 1920 年の 5 月と 8 月にふたたび逮捕された。このときの罪状は反革命組織「ナショナル・センター」に関与したというものであった。<sup>71</sup> 1993 年に刊行された事典『1917 年ロシアの政治活動家』にも、サバシニコフは『「ナショナル・センター」モスクワ支部の積極的な参加者』とある。<sup>72</sup> しかし、彼と「ナショナル・センター」との関わりには不明な点が多い。たとえば『ヴェチェカー [反革命・サボタージュと闘う全ロシア非常委員会] 赤書』全 2 巻を見ると、サバシニコフの名前が出てくるのは一度だけである。それは「1918–1919 年の時期における反革命組織の活動概観」の中の「カデット党」の項で、「1918 年末および 1919 年、ヴェチェカー特別部によってカデット党中央委員会が清算されるまでの間、この中央委員会はモス

<sup>66</sup> Там же. С.341.

<sup>67</sup> Там же. С.384–392.

<sup>68</sup> Там же. С.400. 第一次世界大戦中は負傷者の救護活動のために、さまざまな社会組織が衛生部隊を組織し、個人の寄付によるものもあった。Там же. С.564.

<sup>69</sup> Политические деятели России 1917. С.283.

<sup>70</sup> Протоколы Центрального комитета конституционно-демократической партии. 1915–1920 гг. М., 1998. Т.3. С.368, 404; Политические деятели России 1917. С.283.

<sup>71</sup> Политические партии России. Конец XIX – первая треть XX века. Энциклопедия. М., 1996. С.542.

<sup>72</sup> Политические деятели России 1917. С.283.

クワに残ったメンバーに代表される形で会合を続けている」とあり、そのメンバーの一人にサバシニコフの名前が挙がっている。<sup>73</sup> しかし、そこには彼の具体的な活動については何ら記されていない。さらに、2001年に刊行された資料集『全ロシア・ナショナル・センター』には、サバシニコフの名前は一度も出てこない。<sup>74</sup> ここから、サバシニコフが「ナショナル・センター」に関与したというのは、事実としてははっきりしないといえる。実際、1920年11月に彼は無罪とされている。<sup>75</sup>

内戦終結後の1921年7月、サバシニコフは「全ロシア飢餓救済委員会」（ポムゴール）に参加し、会計を務めた。飢饉に苦しむ農村を救うために社会活動家・知識人によって創出されたこの組織は、ボリシェヴィキ政権に対してすぐれて自立的な性格をもっていた。飢餓救済委員会のメンバーには他に、ビリュコフ П. И. Бирюков, ブルガーコフ В. Ф. Булгаков, ゴーリキー М. Горький, ザイツェフ Б. Зайцев, キシュキン Н. М. Кишкин, クスコフ Е. Д. Кускова, オリデンブルグ С. Ф. Ольденбург, プロコポーヴィッチ С. Н. Прокопович, トルスタヤ А. Л. Толстая, スタニスラフスキー К. С. Станиславский などがいた。<sup>76</sup> しかし、早くも8月には委員会メンバーは逮捕された（コミュニストは除く）。釈放後、サバシニコフは政治活動から次第に遠ざかった。<sup>77</sup>

## サバシニコフの晩年

これまで見てきたようにサバシニコフには、金や砂糖を扱う富裕な実業家、自然科学と人文の図書を扱う出版者、民衆の教育問題を扱う社会活動家、リベラル系の農業経済学に感化された領地経営者、カデットとして分類される政治家など、さまざまな顔を持ち、それぞれの方面で注目すべき活躍を果たした。その目覚しさと対照的に、十月革命とそれに続く内戦期の混乱の中で、彼は持てるものの多くを喪失していった。とりわけ17年の10月（旧暦）の騒乱の中で、トヴェリ大通りにあった住居兼出版所が火事に遭い、原稿や図書を含む財産を焼失したことは、彼にとって大きな打撃となった。しかし、サバシニコフの生涯で最も驚異的なことは、彼が時代の流れの中で多くのものを失いながらも、その後も流れの中で抗い続けたことである。

18年10月23日モスソヴェート幹部会 Президиум Моссовета は、モスクワの私立出版

<sup>73</sup> Красная книга ВЧК. Издание второе, уточненное. М., 1990. Т.2. С.61.

<sup>74</sup> Всероссийский национальный центр. М., 2001.

<sup>75</sup> Политические партии России. С.542.

<sup>76</sup> Сабашников М. В. Записки. С.9; 児島修一『二十世紀初頭ロシアの経済学者群像』, 61–62頁。

また、ゴーリキーはプロコポーヴィッチの妻クスコフとニージニー・ノヴゴロド時代からの知り合いであった。Политические партии России. С.293–294.

<sup>77</sup> Политические партии России. С.542.

社を公有化し、その会社資本金と、所有者の資本をモスソヴェートの所有物とする公布を發した。前年の火事に加え、この決定がなされたことにより、サバシニコフ兄弟出版社も存亡の危機に瀕した。<sup>78</sup> しかしサバシニコフは、メンズビルやスペランスキー、ゲルシェンゾーンら出版社と長年にわたって仕事をしてきた執筆者たちと共に、会社再開のために運動を続け、19年1月には教育人民委員 A. B. ルナチャルスキーとの面会にこぎつけた。サバシニコフらの請願は受け入れられ、ルナチャルスキーからは「以前どおりに元気に働くように *бодро работать по-прежнему*」との言葉がかけられた。出版所再開のための資金が融資され、革命によって中断していた出版計画が再開されることになった。『覚書』では、この後にサバシニコフがルナチャルスキーから直接聞いたエピソードを紹介している。ルナチャルスキーが行った個人出版社についての講演に関して、レーニンがルナチャルスキーに「サバシニコフ兄弟社のような出版社は、われわれは支援しなければならない *Такому издательству, как издательство Сабашниковых, мы должны оказать всяческое содействие.*」と語ったという。<sup>79</sup> 革命前の1912年にレーニンは、クラコフから母に送った手紙の中で妹の M. И. ウリヤーノワの事業について次のように書いている。「翻訳の仕事については、話をまとめるのが困難です。モスクワかピーテルで出版者へのつてを見つけなければなりません。私の考えでは、ナーヂャの提案しているのがよい案だとおもわれます。——サバシニコフ兄弟に照会してみようというのです。Насчет переводной работы трудно устроить: надо к издателям найти связи в Москве или Питере. Надя предлагает, я думаю, хороший план — осведомиться у Сабашниковых.」<sup>80</sup>

内戦期が終わりネップの始まる20年代においても、紙の分配の問題や、資金繰りなどで個人出版社の経営には物質的な困難が付きまとったが、にもかかわらずサバシニコフは、出版事業で意欲的なプロジェクトをスタートさせている。それは、バフルーシンとツャヴロフスキーの編集による『過去の記録 *Записи Прошлого*』シリーズ(1925-1934)で、回想や書簡集といったロシア文学者の周辺資料をまとめたものである。しかしながらネップの終結の後、1929年、「サバシニコフ兄弟出版社」の活動は、他の多くの個人出版社と同様に、終止符を打たれることになった。出版社の存続を求めて、サバシニコフはふたたび請願書を提出したが、受け容れられなかった。この時の請願書には、サバシニコフ夫妻の請願に続いて、ルナチャルスキー、B. ネフスキー、B. ヴォルギンといった権威あるボリシェヴィキたちの言葉が添えられている。その中でルナチャルスキーは、レーニンが「サバシニコフ兄弟のような、最も文化的なものは援助しなくてはならない、彼らを完全に差

<sup>78</sup> *Сабашников М. В. Записки. С.474-475.*

<sup>79</sup> *Там же. С.476.*

<sup>80</sup> В. И. Ленин. Пол. соб. соч. издание 5-е. М., 1965. Т.55. С.330-331. 文中のイタリックはママ。日本語訳は『レーニン全集』第37巻、大月書店、1960年、445頁。文中の傍点はママ。

し替えることができない間は。Наиболее культурным из них, вроде Сабашниковых, надо помогать, пока не будем в силах их заменить полностью。」<sup>81</sup> と語ったと伝えている。このせつかくの口添えも、結局は功を奏すことはなく、1930年サバシニコフ兄弟出版社の看板はついに下ろされることになった。しかしこの出版社の基盤の上にサバシニコフは、今度は『過去の記録』シリーズの編集をしていたバフルーシンとツャヴロフスキーと共に、新しい出版社「北方 Север」を立ち上げた。そこの責任編集者の一員として働き続け、『過去の記録』シリーズの出版を継続したのである。しかし、サバシニコフの苦闘はさらに続き、34年には「北方」も閉鎖させられ、他の小規模出版社と一緒に「ソヴィエト作家 Советский писатель」に吸収合併されることになった。サバシニコフ兄弟出版社の活動として知られる出版事業はこれをもって終わりを告げる。

その後のサバシニコフは「協力者 Сотрудник」という小さな会社で働いた。レオーノフの娘ナターリヤが書くところでは、サバシニコフはそこで子供向けの知育玩具のようなものを作っていたというが、『覚書』に収められているそれらの写真を見ると、書籍とは違って、トランプのような体裁のカードや薄い冊子状の印刷物を扱っていたらしい。<sup>82</sup> サバシニコフのそれ以前の精力的な仕事を振り返れば、寂しさを感じさせないわけではないが、最後まで印刷・出版業にこだわった点は立派というべきだろう。サバシニコフは41年11月、ドイツ軍による爆撃に自宅が巻き込まれ、瓦礫の中から助け出されたが、健康を著しく損なうこととなった。最晩年は病気がちとなり、1943年2月に亡くなった。

しかしながら、彼の人生の激動ぶりを考えれば、ともかくも彼が天寿をまっとうしたことには意外な感もある。サバシニコフは革命後に何度かの逮捕歴があり、『覚書』によると、18年5月から8月、20年5月、20年10月、21年8月、30年12月から31年1月、の5回であるという。<sup>83</sup> カデット党员としてそれなりの要職についていたサバシニコフには、それだけで身の危険を覚悟する必要があったはずである。20年の逮捕の折は古参ボリシェヴィキのウラジーミルスキーМ. Ф. Владимирский の口利きによって釈放された。<sup>84</sup> 医師であったウラジーミルスキーは若い頃に、サバシニコフの亡くなった弟セルゲイの療養に付き添ったことがあり、またサバシニコフ兄弟出版社の翻訳をしたこともある旧知の仲だった。<sup>85</sup> また21年の逮捕では「飢餓救援委員会」のメンバーたちと一緒にだったが、一

<sup>81</sup> №8. Заявление М. В. и С. Я. Сабашниковых в Президиум ЦИК СССР о восстановлении в избирательных правах // Сабашников М. В. Записки. С. 531–534.

<sup>82</sup> Леонова Н. Л. Из воспоминаний. // Леонид Леонов в воспоминаниях, дневниках, интервью. С.172.; Сабашников М. В. Записки. С.519.

<sup>83</sup> Сабашников М. В. Записки. С.453.

<sup>84</sup> Политические партии России. С.542.

<sup>85</sup> Сабашников М. В. Записки. С.326.

緒に逮捕されたメンバーたちが追放処分などでロシアを離れたことを考えると、ソ連国内に留まったサバシニコフのサバイバルぶりは非常に稀なことではなかろうか。最も危険が迫ったのは30年から31年にかけての逮捕で、この時はかつて経営したリュビーモフカの砂糖工場の関係者と一緒であった。サバシニコフは無実を訴え続け、ようやく釈放されたが、かつての工場長コルホフは銃殺、工場のあった領地の元支配人シェヴェリョーフはカザフスタンに流刑された。<sup>86</sup>

こうしてみると、第一次世界大戦と革命を境にサバシニコフの人生からは多くのものが失われていき、物質的に財産を失っただけでなく、精魂を傾けた出版事業の内容にこだわることもできなくなった。しかし出版社が築き上げた実績（サバシニコフ兄弟出版社は、自然科学・文学史・文芸のジャンルにわたる600以上のタイトルの書籍を世に出した<sup>87</sup>）は、結果的にレーニンの好評価をもたらした。そして、それがルナチャルスキーによる引用やレーニンの書簡の中に残ったことで、組織としての出版社は消滅しても、サバシニコフ自身の命だけは救ったのではないかと考えられる。サバシニコフの死後、父の事業を支えてきた長男のセルゲイは43年9月に逮捕され（3度目の逮捕）、翌44年に10年の刑を言い渡された。51年12月にセルゲイは、新たに捏造された事件について追起訴されたが、それは30年代に政府の転覆を企図していたというテロリスト組織についてのものだった。ソ連邦最高裁判所軍事参事会は、検事も弁護士も証人もいない裁判でセルゲイに銃殺刑の判決を下し、52年8月にセルゲイは銃殺された。<sup>88</sup>

## まとめ

サバシニコフとレオーノフとの接点が生れたのは22年のことであり、その頃のレオーノフは作品を活字にしていない、いまだ文学者としては駆け出しの時期にあった。サバシニコフは政治家としては、「飢餓救援委員会」への参加と委員会メンバーたちとの逮捕の後、政治活動とは距離を置き始める頃である。そして、革命前からの資産の大半が失われたが、私立出版社としての活動再開の許可が下り、事業の建て直しに力を注いでいる時期である。20年代のレオーノフの文学的傾向は「同伴者作家」として位置づけられるが、

<sup>86</sup> Там же. С.11. サバシニコフの孫で『サバシニコフの覚書』出版に参加したペレスレギナの説によると、コルホフの罪状は「サバシニコフの甥で、国外に亡命し、共和＝民主連合 Республиканско-демократическое объединение (РДО) を率いていた Б. А. エヴレイノフの密使と連絡を取り、ソ連国内の政治・経済状況について情報をもらした」ことだとされた。ちなみに、サバシニコフの姉ニーナ・エヴレイノワは1922年にソ連を出国し、はじめは3人の子供がいたブラハに暮らした。後にブルガリアへ移り、晩年はフランスのトゥールーズで長男ウラジーミルと生活し、45年6月に没した。この消息は彼女の孫によって1992年に明らかにされた。Там же. С. 565.

<sup>87</sup> Большая советская энциклопедия. 3-е изд. М., 1975. Т.22. С. 473–474.

<sup>88</sup> Сабашников М. В. Записки. С.12. 死後の56年にセルゲイは名誉回復された。

サバシニコフ家の「婿」として捉えなおすならば、サバシニコフの家庭や出版社に広がる人間関係から考えられる影響関係は、作家のこの傾向を別の側面から説明することにもなるだろう。

例えば、レオーノフの文学者としてのキャリアを考えると、ゴリキーの存在は常に意識されるものだが、そこにサバシニコフの観点を付け加えることで、両者の関係は違った色彩を帯びてくる。すなわち、サバシニコフの生涯における登場人物としてのゴリキーは「飢餓救済委員会」の仲間であり、帝政時代から同じ出版業界に生きるものとしての連関の中にいる。また、サバシニコフの側から見て、彼とレオーノフが接近するきっかけを作った、サバシニコフの姉ニーナ・エヴレイノワや親類のマルガリータ・サバシニコワ＝ヴォローシナなどの名前を見ると、レオーノフが同年代よりもむしろ革命前の文化グループに親近していたことが推察できる。

さらに、サバシニコフが 1924 年 8 月にヴォローシンに宛てた手紙の中には、次のようなくだりがある。「我々、本の製造者、出版者も困難な日々を耐えています。ここでも税金、あちらでも税金、家賃の支払、住宅組合のメンバーからの除名——これら全てのことが不意に我々に対して、かくも豊穡に浴びせかけられたのです。というのも我々が**ネップマン**のグループに入ったからです！もちろん誤解によるもので、こんなことは全て、いつかは片がつくでしょう。Мы, производители книг, издатели тоже переживаем трудные дни: налоги здесь, налоги там, квартирные платы, исключение из состава жилтовариществ — все это как из рога изобилия вылилось внезапно на нас, т. к. мы попали в группу **нэпманов**!, конечно, по недоразумению, когда то все это разберется. 」<sup>89</sup>

この頃、サバシニコフが「ネップマン」のそしりを受けているのは、レオーノフの第 2 長編小説『泥棒』との関わりから見ると非常に興味深い。この手紙が書かれているのは、レオーノフにとって最初の単行本がサバシニコフの手を借りて世に出る時期（23 年・24 年）のことである。サバシニコフが出版業を再開させたことで、実際の企業としての決算の如何に関わらず、彼の身边には人が注目するような資金の流れがあったのであろう。25 年から構想・執筆が始まった『泥棒』の主人公ミチカの転落は、「ネップマンの妻から侮辱を受けた」ことがきっかけとされる。かつての赤軍の勇士ミチカは、ネップで経済的に潤う個人商店を狙う金庫破りとなったのだった。当時の作家にとって後ろ楯となっていたサバシニコフが、ネップマンの側に分類されていた事実は、作者自身の社会観にも大きく影響するものである。したがって『泥棒』という、ネップ期を舞台として墮落した主人公とそれを見つめる三文小説家の関係が描かれた小説について考えるうえで、サバシニコフ

---

<sup>89</sup> «Очень часто вспоминаем гостеприимство доброе Ваше...» // Из творческого наследия русских писателей XX века. М. Шолохов А. Платонов Л. Леонов. С.491. 太字はママ。

という人物像は新しい視座を与えてくれるのである。

## **Роль книгоиздателя М. В. Сабашникова в творческой жизни Л. М. Леонова**

ТАНАКА Масаки

Эта статья посвящена анализу влияния книгоиздателя М. В. Сабашникова (1871–1943) на творчество советского писателя Л. М. Леонова (1899–1994). Первые книги писателя были опубликованы частным издательством М. и С. Сабашниковых ещё в 1923–24 гг. 4-мя отдельными изданиями. Поддержка М. С. Сабашникова объясняется тем, что писатель женился на дочери издателя Татьяне в 1923 г. и проживал в его семье.

Сегодня М. С. Сабашников пользуется известностью прежде всего по его издательской деятельности. Издательство, которое он создал вместе с младшим братом Сергеем, опубликовало больше 600 книг до 1934 г. Впрочем, чтобы понять роль издателя в начальной карьере молодого писателя, нужно выяснить многосторонний характер деятельности М. С. Сабашникова. Биографические факты показывают, что он был заметной фигурой в дореволюционной России.

По происхождению, он был потомственным почетным гражданином и богатым купцом, который занимался сахаром и золотом. Он осиротел довольно рано, но вырос в прогрессивной атмосфере, благодаря тому, что его семью окружало интеллигентное общество. Он заинтересовался вопросами просвещения народа, и вёл дела под влиянием идей либеральных экономистов. Он избирался гласным уездных земских собраний и московской городской Думы. Он так же известен как крупный деятель кадетской партии. По образованию он был биологом, и ещё в студенческие годы издавал научные работы своих учителей. Но после окончания Московского университета он начал более профессионально

заниматься опубликованием книг по естественным и филологическим наукам.

Несмотря на то что этот человек потерял многое в бурные дни войны и революции, он всё же остался на родине и старался бороться за продолжение своего дела. В 20-х гг. связь с таким деятелем привела молодого Л. М. Леонова не только к материальной помощи, но и к неоценимому богатству — знакомству с обществом интеллигенции и расширению кругозора. Поэтому, информация о такой личности даёт нам возможность пересмотреть оценку творчества и общественной деятельности писателя Л. М. Леонова.